



Kashima Arts

An Exhibition of
Japanese Paintings and
Works of Art

2020 SPRING

BISAI SEN 撰

〇
三



若き応挙、
気迫に満ちた
傑作

明和2年頃、應挙30代前半の作。落款にある「僊嶺」は「應挙」を名乗る直前に用いた号である。鋭い鉤爪を振りかざしながら、黒々とした雲を薙ぎ払い、顔を覗かせる龍の姿は迫力に満ちており、観る者に畏怖の念すら抱かせる。架空の存在をこれほどの実在感で描き出すことが出来たのは、写生派の祖たる應挙ならではの。構図等は狩野派の典型表現に倣ったものだが、力強く気迫に溢れた筆遣いで雄渾な龍の姿を描き出し、若いながらもすでに優れた画力を備えていたことが本作からは窺える。

僊嶺



013

田山 應挙 まるやまおうぎよ

雲龍図

紙本 淡彩

130×50㎢／224×65㎢

Maruyama Ogyo (1733-1795)

Dragon in Clouds

Slight color on paper

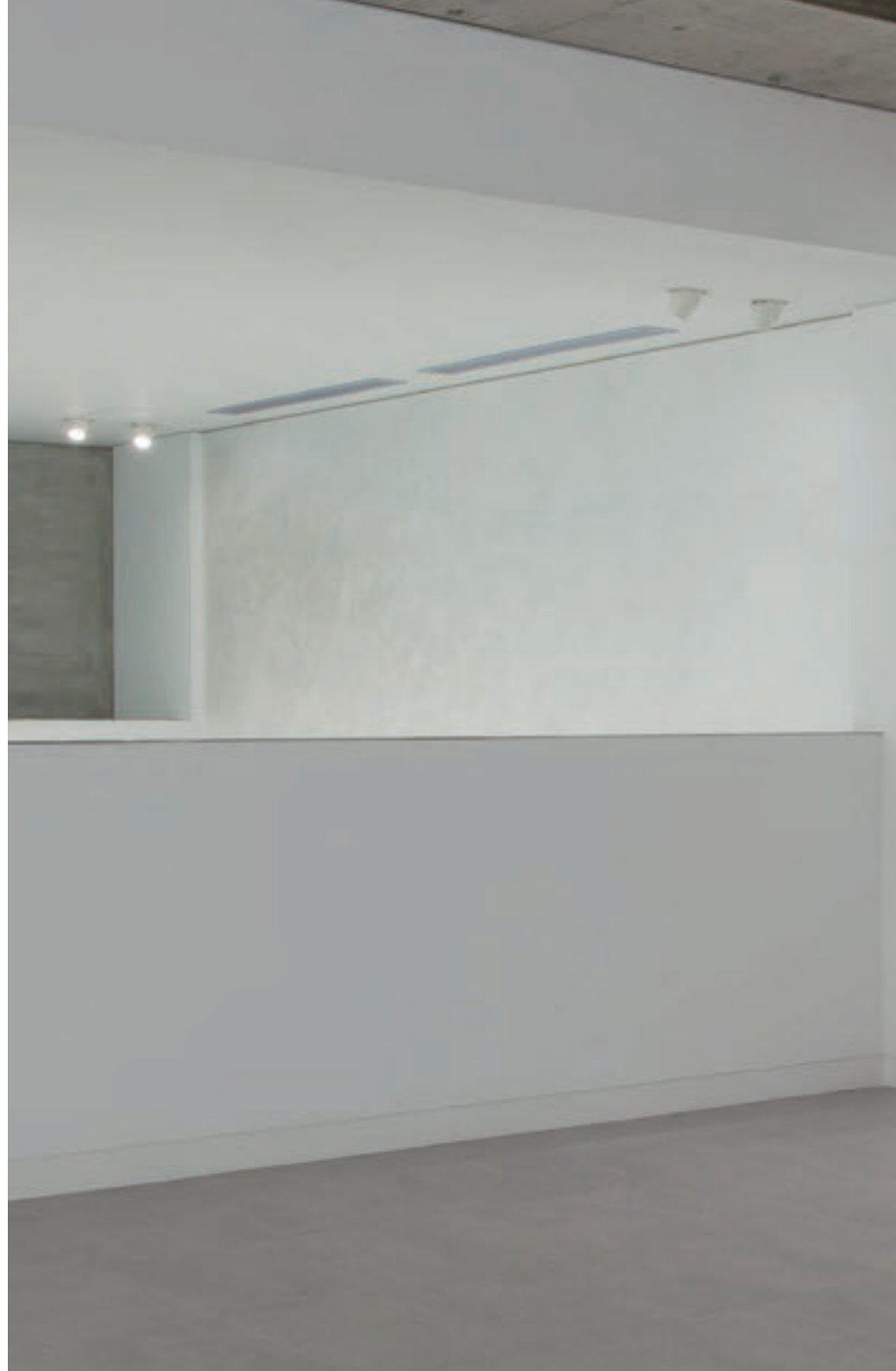
¥8,000,000





龍吟









059

石川 九楊 いしかわ きゅうよう
鳥 I

紙本 水墨 共シール 額装
石川九楊真蹟之證
登録番 第 0559 号
22 × 16 cm / 35 × 28 cm

Isikawa Kyūyō (1945-)

Bird I

ink on paper,
with a label signed and sealed by the artist,
framed, with a certificate of authenticity
by Ishikawa Kyūyō Shinsēki no Shō
(Registration no. 0559)

¥ 800,000

言葉を書く 芸術

前衛書が産声を上げた昭和20（1945）年に奇しくもこの世に生を受けた九楊。書は「言葉を書く」芸術とし、起筆・送筆・終筆のそれぞれの段階で筆と紙の間に生じる接触・摩擦・離脱の感触と痕跡である「筆蝕」を本質に据え、前衛書の新たな理論と実験を自身の書業に重ねながら書そのものの本質に迫った。

△群衆立棺文明△は詩人・田村隆一の「立棺」に着想を得た作品で、文字としての安易な読解こそ許さないものの、精神と身体のせめぎ合いが筆と紙の接触面にありありと刻まれている。それは筆蝕という命のあり様の、他の何ものにも還元しえない姿といえよう。

△鳥△では筆先と表面の接触から生じる身体と言葉の対峙において、一点一画に潜む力の流れを拾い上げる九楊の筆が、「鳥」という記号に自由に空を舞う生命としての血肉を与えている。言葉を「書く」ことは己の存在を刻むことであり、そこでは単なる文字や造形としての線や墨象を超えて「掻く」「描く」「画く」「欠く」という出来事が重なり合っている。



058

石川 九楊 いしかわ きゅうよう

群衆立棺文明

三幅対 紙本 水墨 共箱

石川九楊真蹟之證

登録番第0518號

137×22cm / 196×31cm

Ishikawa Kyūyō (1945-)

Gunshu Rikkan Bunmei

A triptych, ink on paper,
with a box signed and sealed by the artist,
with a certificate of authenticity
by Ishikawa Kyūyō Shinsuke no Shō
(Registration no. 0518)

¥1,000,000



062

横山大観 よこやまたいかん

雨霽

絹本 水墨 共板 額装
横山大観記念館登録は第139号
42×56 cm / 66×80 cm

Yokoyama Taikan (1868-1958)

Rain

Ink on silk,
with a board signed and sealed
by the artist, framed.

Yokoyama Taikan Memorial Hall

Registration No. Ho-139

¥3,800,000

